

ひとを育てる活動

マノボとティボリの民族文化を継ぐ

—ブラクール校の先住民族教育プロジェクト—

ひろしま・祈りの石国際教育交流財団助成3年目

3年前初めてブラクールを訪れたフィリピン人青年ジュネフェくんは会報48号の訪問記に、首長の妻ルモットさんがしていた素敵なおネックレスやイヤリングに豊かな文化を感じたと書いています。

本事業の伝統文化継承、民族衣装の縫製技術の実習で、ルモットさん(写真右)の存在は重要です。2年前に夫が亡くなってからも、マノボ文化の守り手として職業教育の現場に顔を出し、民族衣装の縫製に取り組む子どもたちを励ましています。



カラフルな民族衣装を自分たちで縫う

本事業で購入した民族楽器は昨年10月のブラクールの村祭りでは出番を迎えました。住民だけでなく近隣の入植者や政府関係者も訪れて、クリンタン(写真)、バンブーギターなどの伝統楽器とマノボダンスなど民族の祭典を楽しみました。



クリンタンの練習

助成を受けて3年間実施した学力向上、職業教育、伝統文化継承からなる本事業は3月に一旦終了します。今後も民族の豊かな文化を誇りとし、手に職を持った卒業生を送り出せるように、ブラクール教育支援を通じて、教師と父母の取り組みを支えていきます。

ブラクール校の むかし・いま・みらい

<むかし> ブラクールのマノボ民族は狩猟採集、焼き畑で幸せに暮らしていました。1960年代に伐採業者や入植者が入ってきて、木を切り倒し、畑を奪っていきます。1978年、首長のダツ・アノンさん(ルモットさんの亡夫)はレイクセブ町のレックス神父を訪ねました。神父は翌年その組織SCMから3人のティボリ人教師をブラクールに送り、学校を作りました。1995年以降はSCMの一部スタッフが設立したPFPを通じて日本のFOT(故藤原氏設立。2002年度から当会が引き継ぐ)とレックス神父の故郷ピッツバーグの団体が運営を支援しています。

<いま> 地域の中等教育拠点として政府からの補助金が出るようになりました。ハイスクール生徒一人年5000ペソは教師4名分の給与になります。

ヤギ飼育、小規模アグロフォレストリー、学校農園事業など過去の支援の成果として、父母や学校の自主財源が増えました。

<みらい> 昨年10月に開始したパラゴムノキ植林事業(P2参照)の成果が出る5年後からの、より安定した収入と生活を期待しています。



3年生を担当する元あしなが奨学生のマイラ先生

みんなで支えるブラクールの
支援者が減っています
あと少しだけ見守ってください



ご協力いただける方は事務局までお問い合わせください

CMIP奨学生 第2回同窓会開催

CMIPの現奨学生90人にとって、先輩の活躍は良い刺激です。在校生のクリスマス会に合わせ12月19日に同窓会を開催しました。経費200ペソを自己負担としたためか、参加者は昨年の3分の1になり、9名(教師6名、役場の職員1名、他2名)でした。